



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学フロンティア入試Type I の成果と課題 : 量的・質的データの分析を通じて
Author(s)	板東, 信幸; 田村, 志穂美; 岩間, 徳兼 他
Citation	高等教育ジャーナル : 高等教育と生涯学習, 33, 33-43
Issue Date	2026-04
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.33.33
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99284
Type	departmental bulletin paper
File Information	HighEdu_33_p33-43.pdf



Outcomes and Challenges of the Frontier Admissions Type I Scheme at Hokkaido University: An Analysis of Quantitative and Qualitative Data

Nobuyuki Bando*, Shihomi Tamura, Norikazu Iwama and Naohiro Iida

Institute for the Advancement of Higher Education, Hokkaido University

北海道大学フロンティア入試 Type I の成果と課題 —量的・質的データの分析を通じて—

板東 信幸**, 田村 志穂美, 岩間 徳兼, 飯田 直弘

北海道大学高等教育推進機構

Abstract — This report examines the outcomes and challenges of the Frontier Admissions Type I scheme at Hokkaido University, implemented since the 2022 entrance examinations as a distinctive form of holistic admissions. Using quantitative and qualitative data, the report provides evidence for improving the university's admission system. Quantitative analysis of application and admission data between 2022 and 2025 highlights two persistent issues: the inability to meet admission quotas and the declining proportion of applicants, and successful candidates from within Hokkaido. These patterns suggest structural constraints in the use of the Common Test for University Admissions for final admission decisions, as well as limited recognition of the scheme among local high schools. Complementing this, qualitative data derived from semi-structured interviews with faculty members involved in admissions reveal notable characteristics of students admitted through Type I. Such students often demonstrate strong initiative, active engagement in university events, international aspirations, and enthusiasm for research, while some experience a gap between motivation and actual academic skills. Taken together, these findings indicate that the Frontier Admissions Type I system plays a unique role in attracting students with distinctive potential but requires further refinement in outreach, student support, and the balance between institutional goals and standardized requirements.

(Accepted on 23 January 2026)

1. はじめに

北海道大学の総合型選抜の歴史は、古くは平成 13 年度の AO 入試導入まで遡る。北海道大学はこの入試を、「大学の将来を託すことができる優秀な人材

を見出し社会の要請に応えるための有効な手段として位置付け、実施に踏み切った」(山岸, 2002)。その後、令和 3 年度入試(令和 3 年度 4 月入学者対象, 以下同様)からの総合型選抜への移行という大きな変革を受け、従来の AO 入試を刷新し、令和 4 年度

*) Correspondence: Institute for the Advancement of Higher Education, Hokkaido University, Sapporo 060-0817, Japan
E-mail: n.bando@high.hokudai.ac.jp

**) 連絡先: 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目 北海道大学高等教育推進機構

入試より北海道大学独自の総合型選抜「フロンティア入試」を導入するに至った。かつて募集人員 64 名から始まった北海道大学の AO 入試は、新規の学部・学科の参入による増加や、平成 23 年度入試の総合入試の導入による募集単位の変更などによる減少を経て、現在は 135 名の募集枠を擁するまでに拡大している。

フロンティア入試には、フロンティア入試 Type I（以下、Type I）とフロンティア入試 Type II（以下、Type II）という二つの区分が存在するが、本報告は、Type I に焦点を当てて考察する。

まず、「1.1 フロンティア入試の概要」と「1.2 フロンティア入試 Type I の評価の特徴」でフロンティア入試全体の概要と Type I の特徴を説明する。その後、「1.3 北海道大学における入試の効果検証とこれまでの課題」で、北海道大学で入試の効果検証がどのように行われてきたのかを確認するとともに、その課題を明らかにする。その上で、「1.4 分析の目的・狙い・意図」で量的データと質的データ両面からの分析の必要性を論じる。

その議論を踏まえた上で、「2. フロンティア入試 Type I の量的データの分析」で令和 4 年度入試から令和 7 年度入試までの量的データを分析し、志願者及び合格者の動向を明らかにする。次いで、「3. フロンティア入試 Type I の質的データの分析」で募集単位を置く学部・学科の入試委員等への半構造化インタビュー調査を通じ、入学者の質的な特性を明らかにする。本報告は、これら両面からの分析を通じて Type I の成果と課題を多角的に考察し、北海

道大学の入試制度改善に資する知見を得ることを目的とする。

1.1 フロンティア入試の概要

フロンティア入試における Type I と Type II の差異は、選考方法と募集単位である。以下、両者の違いを詳述する。

Type I は、従来までの総合型選抜を踏襲しながらも、コンピテンシー評価（後述）の導入により、受験生の能力・資質¹をより多面的に評価している点の特徴である。

第 1 次選考でコンピテンシー評価書、調査書、自己推薦書、諸活動の記録、個人評価書等で書類審査を行い、第 2 次選考で面接、課題論文、総合問題等を課す。最終的な合否判定には大学入学共通テストの結果が用いられ、各募集単位の定める基準点に達している者のみが合格となる（第 1 次選考と第 2 次選考の配点は表 1 を参照）。

Type I の募集単位は、理学部地球惑星学科、医学部医学科、医学部保健学科（看護学専攻、放射線技術科学専攻、検査技術科学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻）、歯学部、工学部応用理工系学科・応用マテリアル工学コース、工学部環境社会工学科・社会基盤学コース、水産学部であり、令和 9 年度入試からは獣医学部が新たに加わる予定である。

一方、Type II は、従来の総合型選抜より出願書類の作成負担を軽減している点や、基礎的な知識、技能、思考力、判断力等を適性試験により評価してい

表 1 〈Type I〉第 1 次選考と第 2 次選考の配点

学部・学科・専攻等			第1次選考					第2次選考			
			個人 評価書	調査書	コンピ テンシー 評価書	自己 推薦書	諸活動 の記録	英語 能力	課題 論文	面接	コンピ テンシー 評価書
理学部 地球惑星科学科				25	75				25		75
医学部	医学科			20	80				40	60	
	保健学科	看護学専攻		50	50				100		
		放射線技術科学専攻		50	50				100		
		検査技術科学専攻		50	50				100		
		理学療法学専攻		60	40				100		
		作業療法学専攻		30	30	40				100	
歯学部				20	80			50	50		
工学部	応用理工系学科（応用マテリアル工学コース）			60	40			100			
	環境社会工学科（社会基盤学コース）			50	50			50	50		
水産学部				50	50				100		

る点が特徴である。

第1次選考において調査書、自己推薦書、個人評価書等で書類審査を行い、第2次選考においては、各募集単位が指定する数学・理科に関する能力を測定する適性試験と面接等を課す（第1次選考と第2次選考の配点は表2を参照）。

Type II の募集単位は、理学部数学科、理学部物理学科、理学部化学科、理学部生物科学科・高分子機能学専修分野、工学部応用理工系学科・応用物理工学コース、工学部機械知能工学科、工学部環境社会工学科・環境工学コースである。

Type I と Type II の募集人員、及び実施学部定員に占める募集人員の割合については表3に示したとおりである。フロンティア入試の募集人員は合計144名であり、北海道大学における全募集人員の

5.7%を占める。

1.2 フロンティア入試 Type I の評価の特徴

Type I における特色ある評価方法として、「コンピテンシー評価」が挙げられる。これは、高校における多様な活動を、各募集単位が定める評価軸（ルーブリック）に沿って高校教諭が評価し、その結果を選抜に利用する仕組みである。この評価方法は、大学入学後に成長し、卒業後社会で活躍するために必要な能力・資質を、入り口となる入試で測り、入学後の教育につなげることを目的として導入されたものであり、「大学入学後に『伸びる』と期待される潜在的な資質をもつ生徒を選抜することがねらいである」（山岸, 2002）という AO 入試導入当初からの理

表2 〈Type II〉第1次選考と第2次選考の配点

学部・学科・専攻等		第1次選考			第2次選考	
		個人評価書	調査書	自己推薦書	適性試験	面接
理学部	数学科	70		30	450	150
	物理学科	80		20	450	250
	化学科	70		30	450	100
	生物科学科（高分子機能学専修分野）	70		30	450	300
工学部	応用理工系学科（応用物理工学コース）		90	10	450	50
	機械知能工学科	70		30	450	200
	環境社会工学科（環境工学コース）	60		40	450	200

表3 〈Type I・Type II〉募集人員・定員に占める募集人員の割合

学部・学科・専攻等				定員	募集人員			募集人員/定員		
					R4-R7	R8	R9	R4-R7	R8	R9
Type I	理学部 地球惑星科学科			60	5	5	5	8.3%	8.3%	8.3%
	医学部	医学科		100	5	5	5	5.0%	5.0%	5.0%
		保健学科	看護学専攻	70	7	7	7	10.0%	10.0%	10.0%
			放射線技術科学専攻	37	7	7	7	18.9%	18.9%	18.9%
			検査技術科学専攻	37	10	5	5	27.0%	13.5%	13.5%
			理学療法学専攻	18	4	4	4	22.2%	22.2%	22.2%
			作業療法学専攻	18	7	3	3	38.9%	16.7%	16.7%
	歯学部			53	5	5	5	9.4%	9.4%	9.4%
	工学部	応用理工系学科(応用マテリアル工学コース)		40	4	4	4	10.0%	10.0%	10.0%
		環境社会工学科（社会基盤学コース）		40	4	4	4	10.0%	10.0%	10.0%
水産学部			215	20	20	20	9.3%	9.3%	9.3%	
獣医学部			40	—	—	5	—	—	12.5%	
Type II	理学部	数学科	50	13	13	13	26.0%	26.0%	26.0%	
		物理学科	35	14	14	11	40.0%	40.0%	31.4%	
		化学科	75	11	11	11	14.7%	14.7%	14.7%	
		生物科学科（高分子機能学専修分野）	40	3	3	3	7.5%	7.5%	7.5%	
	工学部	応用理工系学科（応用物理工学コース）		50	15	15	15	30.0%	30.0%	30.0%
		機械知能工学科		120	5	5	5	4.2%	4.2%	4.2%
		環境社会工学科（環境工学コース）		50	5	5	5	10.0%	10.0%	10.0%

念を色濃く受け継ぐものと言えよう。

文部科学省が選出した「令和3年度大学入学者選抜における好事例集（文部科学省，2022）」においても「高校での日常的な学習を丁寧に評価し，大学教育へと繋げる意欲的な試み」と評価されている。

図1は，具体的な評価のイメージである。○印ごとに評価ルーブリックが設定されており，科目・諸活動ごとに複数の高校教員が評価する。評価はあくまでも高校における日常的な教科指導と諸活動であり，高校教育の範囲に絞って評価を求めている。したがって，自発的なボランティア活動などの校外で

の独自活動は評価に含まれない。また，ルーブリックにおける最高評価であるAをつける場合には，根拠資料（以下，証跡）の提出が必要となる。

評価の特徴として特別な実績や活動が必ずしも必要ではないことが挙げられ，「受験生や高等学校の置かれた環境格差，経済的格差等が極力反映されることのないように配慮」（橋村他，2021）しており，活動自体の評価ではなく，評価領域の指導や活動を通して見えてくる能力・資質の評価を求めている。

次に，コンピテンシー評価のおおよその流れを図2で示した。

学力の3要素	評価項目	教科1	教科2	教科3	教科4
知識・技能	情報へのアクセスと選択	○	○		
思考力・判断力・表現力	疑問を持つ姿勢	○	○		
	情報の関係性の理解と把握	○	○		
	課題解決への現状把握	○	○		
	論理的なプロセスの設定	○	○	○	○
	生じる問題の予測と対応	○	○	○	○
	意図や本質を理解する	○	○		
	表現する	○	○		
学びに向かう力・人間性（主体性・多様性・協働性）	挑戦する姿勢	○	○	○	○
	柔軟な発想と自己変容			○	○
	他者との相互関係			○	○
	異なる価値観の受容と尊重			○	○
	チームで協力する			○	○
	リーダーシップ			○	○
	自己研鑽の姿勢	○	○		
	世界の現状と自己との関わり	○	○	○	○

図1 評価マトリックスイメージ

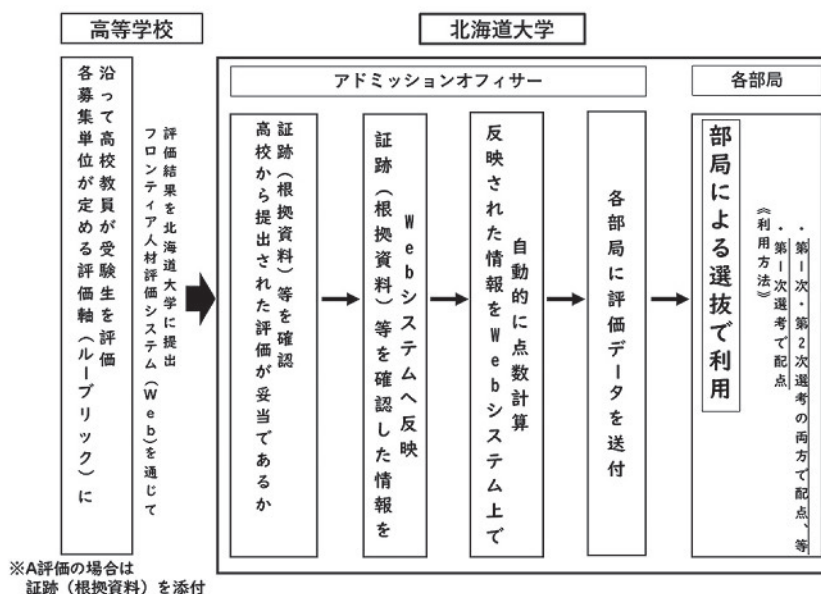


図2 コンピテンシー評価の流れ

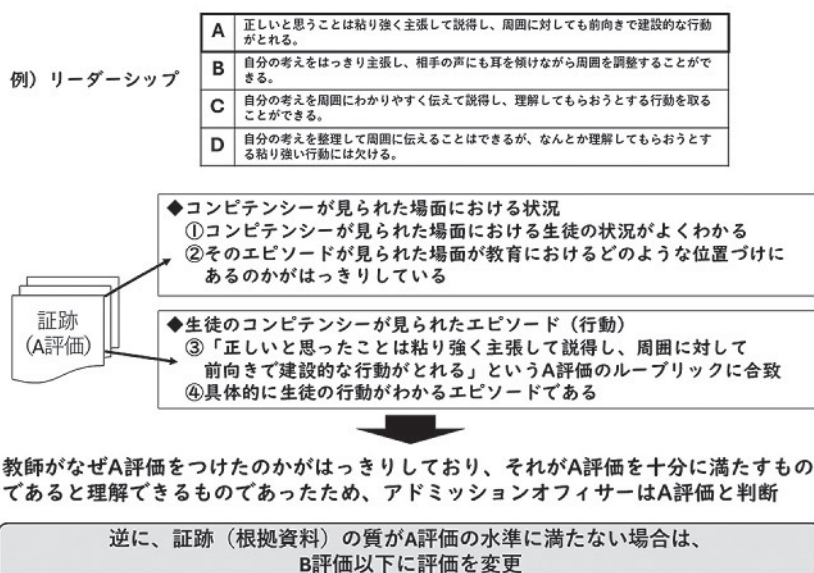


図3 証跡の判断基準

高校教諭の評価結果は、フロンティア人材評価システムという Web システムを通じて提出する。その評価結果についてアドミッションオフィサーが A 評価の証跡等を確認し、図3で示すように、コンピテンシーが見られた場面における状況やエピソードが十分に A 評価として妥当であるかを判断する。妥当性がないと判断された評価は B 評価以下に下げられる場合がある。その後、アドミッションオフィサーが整理したデータを、各部局が選抜に利用する。

1.3 北海道大学における入試の効果検証とこれまでの課題

これまでに北海道大学で実施されてきた入試の効果検証に目を向けると、男女比、道内道外比、出身高校区分を調査したもの（山岸，2002）、それに加えて入学時の質問紙調査によって進路選択の意識や行動を調査したもの（山岸，2004）、卒業時の質問紙調査によって進路、学生生活の振り返り、AO 入試に対する見方を調査したもの（山岸，2006）、高校の評定・大学における成績（当時は GPA を導入しておらず、優の科目数に着目して分析）、卒業後の進路について調査したもの（池田他，2007）、GPA を調査したもの（池田，2009）等がある。

しかしながら、これらの調査は当時の AO 入試を対象としたものであり、現在のフロンティア入試とは実施学部や選抜内容などの点で異なる。そのた

め、ここでもう一度、量的データを概観してその特徴を整理する必要がある。また、質的調査の側面であれば、卒業生を対象とした質問紙調査の自由記述を分析した事例はあるものの、その内容に対して質的に踏み込んだ分析はなされていなかった。

1.4 分析の目的・狙い・意図

そこで、本報告では、Type I の成果と課題を多角的に考察し、制度改善に資する知見を得るという目的を達成するために、以下のような形で量的データと質的データの分析を行う。量的データを分析するにあたり、まずは Type I の志願者数と合格者数を確認する。言うまでもなく、志願者数は、その入試制度が受験者にとってどれほど魅力的であり、かつ社会的に認知されているかを示すバロメーターの一つである。一方の合格者数は、北海道大学の AO 入試を分析する中で、募集人員に対して合格者が大幅に少なかったことが、翌年以降の志願者数減少につながっていた可能性が竹山他（2011）から指摘されており、AO 入試の流れを汲む Type I においても同様の懸念があるため、こちらも注視しなければならない指標だろう。

また、受験者の動向を探る上で、道内比率も無視できない。北海道大学が位置する北海道は、道外から訪れるには航空機による移動が求められる場合が多く、同時に試験日以外にも前後の宿泊が必要とな

るため、道外の受験者にとって時間的・経済的な負担が大きい。まして、大学内で実施される第2次選考は11月中旬に行われるため、共通テストを数カ月前に控えた受験者にとっては数日でも貴重な時間である。

さらに、学校基本調査（文部科学省，2024）によるデータを基に、国立大学入学者における地元入学者比率を都道府県別に見ると、北海道は51.2%と、沖縄県の69.5%、愛知県の60.6%に続いて3番目に高い比率であり、北海道の受験生は国立大学を受験する際に他の都府県よりも地元を選択する比率が高いことがわかる。

にもかかわらず、道内比率が他の入試区分よりも低い実態があるとすれば、その要因の分析と改善が求められる。道内比率を高めることで、志願者の倍率を確保できる可能性もあるだろう。

本報告では、さらに大学教員へのインタビュー調査の結果も分析する。受験者や入学者の実像を把握する上では、選抜の最前線に立ち、また入学後の学生を指導する教員の視点が重要となる。そのためには、質問紙ではなく、インタビューを通じての質的なデータ分析がより適切だと考えられる。

そして、これらの分析から得られた知見を基に、北海道大学の入試制度に対する提言を行いたい。

2. フロンティア入試 Type I の量的データの分析

2.1 志願者数と合格者数

Type I における令和4年度入試から令和7年度入試の志願者数と倍率の推移を表4に示した。

それによれば、全体としては倍率が増加傾向にあるものの、募集単位ごとに精査すると、その様相は一律ではない。理学部地球惑星科学科、医学部医学科、医学部保健学科理学療法学専攻、歯学部、水産学部はどの年度においても志願者数が募集人員を上回っており、特に理学部地球惑星科学科と水産学部は高い倍率を維持している。しかしながら、他の募集単位においては、志願者数が募集人員を満たさない、あるいは志願者自体がいない年もあるなど、志願者確保に苦戦しているものも多く存在する。

さらに最終合格者数については、募集人員の未充足という本入試が抱える年来の課題が見えてくる。事実、フロンティア入試の開始以来、募集人員を充足した募集単位は一度も存在しない。最終合格者数が最も多かった令和6年度入試ですら、充足率は34.6%に留まっている。この大きな要因として、大学入学共通テストの点数を最終合格者の判定に用いるという制度設計が挙げられる。すなわち、第2次選考の時点では募集人員までしか合格者を出していないが、そこからさらに各募集単位が設定する大学入学共通テストの基準点に基づき判定を行うため、最終合格者数が募集人員に達しにくい構造となっている。

表4 〈Type I〉令和4年度入試から令和7年度入試の志願者数と倍率の推移²

学部・学科・専攻等			募集 人員	志願者数				志願倍率				第1次選考合格者数				第2次選考合格者数				最終合格者数			
				R4	R5	R6	R7	R4	R5	R6	R7	R4	R5	R6	R7	R4	R5	R6	R7	R4	R5	R6	R7
理学部 地球惑星科学科			5	15	20	17	20	3.0	4.0	3.4	4.0	9	10	10	9	5	4	5	4	4	2	4	3
医学部	医学科		5	9	10	9	17	1.8	2.0	1.8	3.4	9	10	9	10	5	1	2	1	0	0	1	1
	保健学科	看護学専攻	7	16	10	4	15	2.3	1.4	0.6	2.1	10	5	2	6	—	—	—	2	3	1	2	0
		放射線技術科学専攻	7	12	11	2	8	1.7	1.6	0.3	1.1	9	7	2	3	—	—	—	2	2	0	0	1
		検査技術科学専攻	10	5	6	5	6	0.5	0.6	0.5	0.6	4	4	5	3	—	—	—	3	0	0	1	0
		理学療法学専攻	4	5	7	7	9	1.3	1.8	1.8	2.3	5	6	6	9	—	—	—	4	0	2	2	2
		作業療法学専攻	7	2	3	0	4	0.3	0.4	—	0.6	2	3	—	4	—	—	—	2	0	1	—	2
歯学部			5	5	10	9	8	1.0	2.0	1.8	1.6	5	9	9	5	5	5	5	5	1	1	2	1
工学部	応用理工系学科（応用マテリアル工学コース）		4	0	1	6	5	—	0.3	1.5	1.3	—	1	6	5	—	—	4	5	—	0	2	2
	環境社会工学科（社会基盤学コース）		4	3	2	4	11	0.8	0.5	1.0	2.8	2	2	4	6	1	2	3	4	0	1	2	2
水産学部			20	45	42	63	56	2.3	2.1	3.2	2.8	41	40	40	40	23	20	20	20	6	11	11	9
小計			78	117	122	126	159	1.5	1.6	1.6	2.0	96	97	93	100	39	32	39	52	16	19	27	23

いるのである。事実、第2次選考では歯学部、水産学部が全ての年度で募集人員まで第2次選考合格者を出している他、理学部地球惑星科学科、工学部応用理工系学科・応用マテリアル工学コースは募集人員に近い第2次選考合格者を出している年度が多い。しかしながら、最終的にはどの年度においても募集人員を満たすことができなかった。令和7年度入試を例にとれば第2次選考の時点で52名の合格者を出しており、これは募集人員の66.7%にあたる。しかしながら、最終合格者数は募集人員の29.4%であり、第2次選考合格者の半数以上が大学入学共通テストの基準点を満たせなかった。

2.2 道内比率

続いて、Type I の道内比率を他の選抜区分と比較しつつ分析する。

まずは北海道大学全体の道内比率について検討する。表5の「北海道の18歳人口比率（全国比）」は、全国の18歳人口に占める北海道の比率と、令和4年度の比率を100とおいた際の値を指数として、4年間の推移を表している。なお、表5の年度は入試年度に合わせており、当該入試年度受験を行う18歳人口を基に計算を行っている。そのため、学校基本調査のデータは入試年度の前年度の18歳人口を参照している。例えば、令和4年度入試においては、令和3年度の18歳人口を参照している。

この表によれば、「北海道の18歳人口比率（全国比）」の指数が減少傾向にあることから、全国の18歳人口における北海道の18歳人口の比率が低下していることがわかる。つまり、北海道は全国よりも18歳人口の減少率が高いのである。

これを、同じく表5の「北海道大学志願者道内比

率」及び「北海道大学最終合格者道内比率」と比較してみると、北海道大学においては志願者・最終合格者の両方において道内比率が低下しており、さらにその指数が「北海道の18歳人口比率（全国比）」よりも低い。これは、北海道大学の志願者・最終合格者の道内出身者比率が、北海道の18歳人口減少率を考慮しても減少が著しいことを意味している⁴。

以上を踏まえた上で、Type I における道内比率について検討する。Type I における各募集単位の志願者及び最終合格者の道内比率を表6に示した。この表から以下の点が明らかになった。

まず、Type I は募集人員及び最終合格者数が少なく、わずかな人数の変動が比率に大きく影響することから、個別の募集単位に関する断定的な評価は難しいが、志願者について保健学科看護学専攻及び検査技術学専攻の安定した道内比率の高さが見て取れる。また、工学部環境社会工学科・社会基盤学コースも、令和6年度入試を除き道内比率が高いことがわかる。一方、水産学部はどの年度においても道内比率が低い。次に、最終合格者については、合格者を毎年出している募集単位が理学部地球惑星科学科、歯学部、水産学部のみであり、さらにその中で一定数の合格者を出している募集単位は水産学部のみであるため、ここでは水産学部の言及にとどめるが、志願者の道内比率が低い影響もあり、最終合格者の道内比率も低いのが現状である。

ただし、Type I の結果を見るだけでは、問題の側面しか捉えていない。というのも、一般選抜前期日程等の他の入試区分についても、道内比率が低い可能性も否定できないからである。そこで次に、比較対象として、Type I で募集単位を設けている学部・学科における、一般選抜前期日程の道内比率を表7に示した。この表において、理学部と工学部の

表5 北海道の18歳人口比率（全国比）と北海道大学の道内比率の比較³

		R4	R5	R6	R7
北海道の18歳人口比率 (全国比)	比率(%)	3.94%	3.95%	3.87%	3.86%
	指数	100.0	100.12	98.17	97.77
北海道大学志願者 道内比率	比率(%)	29.40%	27.38%	27.27%	26.45%
	指数	100.0	96.35	92.80	89.66
北海道大学最終合格者 道内比率	比率(%)	31.92%	30.28%	30.01%	29.06%
	指数	100.0	94.23	95.64	92.34

出典：文部科学省「学校基本調査（令和3年度～令和6年度）」に基づき筆者が作成。

表 6 〈Type I〉志願者及び最終合格者の道内比率

学部・学科・専攻等			募集人員	〈道内比率〉志願者				〈道内比率〉最終合格者			
				R4	R5	R6	R7	R4	R5	R6	R7
理学部 地球惑星科学科			5	20.0%	5.0%	23.5%	10.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%
医学部	医学科		5	44.4%	30.0%	22.2%	17.6%	—	—	100.0%	100.0%
	保健学科	看護学専攻	7	75.0%	70.0%	75.0%	46.7%	100.0%	100.0%	50.0%	—
		放射線技術科学専攻	7	58.3%	27.3%	0.0%	50.0%	50.0%	—	—	100.0%
		検査技術科学専攻	10	60.0%	66.7%	80.0%	66.7%	—	—	100.0%	—
		理学療法学専攻	4	20.0%	42.9%	28.6%	22.2%	—	50.0%	0.0%	0.0%
		作業療法学専攻	7	50.0%	0.0%	—	25.0%	—	0.0%	—	0.0%
歯学部			5	20.0%	20.0%	44.4%	50.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%
工学部	応用理工系学科（応用マテリアル工学コース）		4	—	0.0%	50.0%	60.0%	—	—	0.0%	50.0%
	環境社会工学科（社会基盤学コース）		4	66.7%	50.0%	25.0%	45.5%	—	100.0%	0.0%	50.0%
水産学部			20	8.9%	7.1%	19.0%	7.1%	0.0%	9.1%	0.0%	11.1%
小計			78	32.5%	22.1%	27.8%	24.5%	31.3%	21.1%	14.8%	21.7%

表 7 〈一般選抜前期日程〉志願者及び最終合格者の道内比率

学部・学科・専攻等			募集人員	《道内比率》志願者				《道内比率》最終合格者			
				R4	R5	R6	R7	R4	R5	R6	R7
総合入試理系			1034※	31.4%	29.6%	28.2%	29.5%	29.6%	28.5%	28.5%	28.7%
医学部	医学科		85	28.6%	28.2%	25.4%	23.2%	32.7%	33.3%	37.1%	30.0%
	保健学科	看護学専攻	60	71.2%	71.6%	73.7%	86.4%	73.5%	72.1%	73.9%	82.6%
		放射線技術科学専攻	28	76.7%	75.9%	72.3%	70.1%	80.0%	80.6%	83.3%	65.7%
		検査技術科学専攻	25	70.8%	68.9%	76.9%	80.0%	69.4%	63.9%	79.4%	72.2%
		理学療法学専攻	13	61.7%	52.9%	50.0%	55.8%	44.4%	62.5%	31.3%	58.8%
		作業療法学専攻	10	70.0%	56.8%	76.7%	67.6%	63.2%	50.0%	70.0%	93.8%
歯学部		38	30.6%	30.2%	29.3%	34.4%	32.6%	37.2%	24.4%	28.9%	
水産学部		105	25.5%	25.1%	24.3%	26.0%	27.1%	22.2%	20.5%	17.9%	

※R4～R5：984 R6～：1034

募集単位を記載していないが、北海道大学には、予め学部を決めて受験する学部別入試と、学部を決めず文系・理系という大きな括りで受験し、2年進学時に本人の希望と成績により移行学部を決定する総合入試という2種類の入試があり、理学部と工学部は一般選抜前期日程において学部・学科ごとの募集単位を設けておらず、主として総合入試理系からの移行により定員を充足させるため、表7では総合入試理系の道内比率を記載している。

一般選抜前期日程の特徴としては、志願者・最終合格者ともに保健学科全体の道内比率の高さが顕著である。また、他の募集単位においては、総合入試理系、歯学部が毎年30%前後、医学部医学科と水産学部が毎年25%前後で推移している。

Type I と一般選抜前期日程を比較した場合、医学部医学科、工学部環境社会工学科・社会基盤学コー

スは一般選抜前期日程と比較しても遜色ない道内比率である。その一方で、医学部保健学科・放射線技術科学専攻、同理学療法学専攻、同作業療法学専攻、水産学部では、全ての年度において道内比率はType I の方が低い。

つまり、これらの募集単位については、募集単位全体の特性というよりも、Type I の特性として道内比率が低い可能性がある。

ここでさらに入試区分としてのType I の特性を明らかにするため、他の入試区分との比較を行う。入試区分別の志願者・最終合格者の道内比率を表8に示した。

これを見ると、志願者・最終合格者ともに一般選抜前期日程、Type II の道内比率が高いことがわかる。特にType II においては、減少傾向にあるものの、他の募集区分よりも高い道内比率を維持してい

表 8 〈入試区分別〉志願者及び最終合格者の道内比率⁵

募集区分		募集人員	志願者				最終合格者			
			R4	R5	R6	R7	R4	R5	R6	R7
前期	理系の募集単位	1418※	33.7%	33.0%	31.7%	32.3%	34.4%	32.9%	33.0%	33.0%
	文系の募集単位	513	38.6%	37.9%	37.6%	33.0%	39.1%	38.0%	40.4%	34.6%
後期	理系の募集単位	331	21.6%	17.7%	19.2%	18.9%	14.0%	11.1%	10.3%	10.7%
	文系の募集単位	107	18.7%	19.6%	20.1%	16.0%	19.7%	13.7%	17.5%	14.4%
Type I		78	32.5%	22.1%	27.8%	24.5%	31.3%	21.1%	14.8%	21.7%
Type II		66	53.2%	51.9%	39.4%	43.9%	59.7%	67.2%	37.5%	46.7%
国際総合入試		15	25.0%	8.3%	13.5%	14.9%	26.7%	7.1%	7.7%	13.3%
小計		2528	29.4%	27.4%	27.3%	26.4%	31.9%	30.3%	30.0%	29.1%

※R4：1375 R5：1368（医学部医学科－7） R6～：1418（総合入試理系＋50）

る。また、合格者だけに着目すると、一般選抜前期日程・後期日程ともに理系の募集単位よりも文系の募集単位の道内比率の方が高い。

一方、Type I の道内比率を見ると、令和4年度入試こそ志願者・最終合格者ともに入試区分全体における道内比率と遜色がないものの、その後は志願者・最終合格者ともに募集人員全体における道内比率を下回っている。Type I の最終合格者自体が少ないことも加味すれば、本選抜方式を経て入学する道内出身者は、きわめて少ないのが現状である。実際に、令和7年度入試の募集人員全体（帰国生徒選抜、私費外国人留学生入試を除く）に占める Type I の募集人員は3.13%であるのに対し、最終合格者は0.85%であり、道内出身者の最終合格者に限定すれば0.20%に過ぎないのである。

3. フロンティア入試 Type I の質的データの分析

量的データから浮かび上がった動向に加え、フロンティア入試 Type I で入学した学生の質的な特性を把握するため、本入試を実施している A 学部と B 学部の入試担当教員を対象に、半構造化インタビュー調査を実施した。また、両学部には事前に質問項目と調査協力に関する同意書を送付し、調査当日までに署名いただいている。

A 学部については、2024 年 12 月 20 日に調査を実施し、3 名の教員（入試委員）及び 1 名の職員（事務部）が 75 分間のインタビューに応じた。また、B 学

部については、2025 年 1 月 10 日に調査を実施し、1 名の教員（入試委員）及び 1 名の職員（事務部）が 75 分間のインタビューに応じた。

インタビュー調査では、当該募集単位における、選抜の設計思想、GPA や学修に取り組む姿勢及び希望する進路等の学修状況、フロンティア人材評価システムや評価項目の妥当性・信頼性・整合性、入試の実施体制・手順、Type I の改善点等について質問した。インタビューの内容は入試の評価基準や入学者の個人情報も多く含むため、本報告ではそれらの情報を除いた調査結果を示す。また、インタビュー内容抜粋部の筆者による補足は〔 〕で括る。

A 学部では、個別事例よりも入学者全体の傾向が語られた。GPA には明確な傾向は見られず個人差が大きい、全学教育科目と比較して、専門科目の方が GPA は高くなる傾向が若干見られるという（北海道大学の学士課程では、1 年次に全ての学生が総合教育部に所属し、全学教育科目を受講する。同科目は、北海道大学の学生であれば当然身につけるべき共通の素養を育むこと、及び専門科目を学ぶにあたって必要な基礎知識の修得と基本的な発想法・思考法等を養うことを目的としている。また、2 年次以降に各学部で行われる科目は専門科目と称される）。また、入学者の特性としては、「[学部行事やオープンキャンパスなどの]イベントがあった時に、積極的に学生スタッフとして手伝ってくれる」「[他の研究室の学生から留学に関する相談を受け]非常に積極的に外に出て行こうとする姿勢を感じまして、すごく活発な人だなと思った」「やっぱりやる気は確かにある」「[学部]に移行して早々に研究室に

来て、[中略] 質問をしてきたりという人でした」との発話があり、学内行事への積極的な参加、旺盛な海外志向、自己表現力の高さといったものが指摘された。一方で、「モチベーションは高いけど、空回りする」「やる気はあるんですけど、少々不器用なところがある」学生もいるなど、意欲の高さが必ずしも能力と結びついていない「空回り」の事例も報告された。

B 学部では、際立った 2 人の学生像が語られた。1 人目は、「学修においても、その生活態度なり、[中略] 対人のコミュニケーション能力とかですね、その部分も非常に長けた学生」「入学させて非常に期待の出来る学生として評価しています。褒めるところしかない」と述べられ、学業・人格ともに優れた学生であると評価されていた。また同時に、コロナ禍でのワクチン接種ボランティアにも積極的に参加するなど、社会貢献意欲も高く、入学時のコンピテンシー評価と入学後の実績が一貫している好例と見ているとのことだった。2 人目は、共通テストの成績こそ基準点付近であったが、「[別学部の] 研究室に出入りして、[中略] もう 18 歳にしてノーベル賞の先生と片言ながらも英語で話して、興味を持たれてるらしい」「彼も期待以上の[能力を発揮している学生]ですね。自ら行動しているようには思います」「本人の意欲は非常に高いので、いい学生を取ったかなとは思っています。その学生を見てる先生からも非常に、いい評価 [を受けてます]」というように、研究への情熱と行動力は群を抜いており、1 年次から分野の垣根を越えて活動し、入学時の評価を超えて、期待以上の成長を見せているという。同学部では、このような学生こそ、筆記試験中心の従来型の学力だけでは測れない優秀な学生を獲得するという目的に合致した好例と評価している。

フロンティア入試 Type I で入学した学生は、A 学部で指摘されたような旺盛な意欲が能力に結びつかない事例はあるものの、一般選抜の尺度では評価が難しいと考えられる、際立った積極性や主体性をもつ学生の獲得に成功しているといえる。

4. まとめ

本稿では、北海道大学フロンティア入試 Type I を対象に、成果と課題を多角的に考察し、北海道大学の入試制度改善に資する知見を得ることを目的として、量的データと質的データの両面から追跡調査を行った。量的データの分析からは、募集人員の未充足という課題や、道内受験生比率の低下傾向が明らかになった。一方、入試担当教員へのインタビュー調査に基づく質的データの分析からは、同入試で入学した学生がもつ顕著な積極性や主体性などの特徴が明らかになった。

これらの分析結果を踏まえ、今後の課題として以下の 3 点を提言したい。

第 1 に、北海道内における本入試制度の認知度向上と理解促進である。量的データの分析で示された道内出身志願者数の伸び悩みは、本入試制度の理念や魅力が道内の高校教員及び受験生に十分に浸透していない可能性を示唆する。これを打開すべく、積極的かつ戦略的な広報活動を展開するとともに、特に道内の高校教員を対象としたヒアリング調査を実施し、教育現場の視点からみた本入試の課題や期待を汲み上げることが急務であろう。

第 2 に、入学者を対象とした追跡調査の実施である。本報告のインタビュー調査は、あくまで教員の視点・認識に焦点を当てている。しかし、制度の実質的効果を検証するためには、当事者である学生本人の声に耳を傾けることが不可欠である。学生自身が抱く学びの実感や葛藤、そして本入試を経て得られた成長の手応えを、アンケートやインタビューを通じて直接的に把握することで、入試で評価された能力・資質が大学教育の中でいかに涵養されているのか、あるいは入学者がどのような壁に直面しているのかを、より複眼的に検証し得るだろう。

第 3 に、入試制度そのものの再検討である。Type I の定員未充足の要因の一つと考えられる最終合格者の判定における大学入学共通テストの役割と基準点の妥当性については、制度の根幹に関わる問題として、今後も慎重な議論を重ねる必要があるだろう。

フロンティア入試 Type I は、未だ発展の途にある。本報告が、その制度改善に向けた建設的な議論の一助となることを願うものである。

注

- 1 学習指導要領等では「資質・能力」という言葉が使われているが、Type I で行われているコンピテンシー評価は、先天的な「資質」を評価する以上に、受験生が後天的に獲得してきた「能力」を評価するものであるため、「能力・資質」と記載している。
- 2 この表において、工学部応用理工系・応用マテリアル工学コース、医学部保健学科の第2次選考合格者が発表されていない年度があるが、これは大学入学共通テストの利用方法の違いによるものである。フロンティア入試開始時点では、第2次選考合格者は発表せず、第2次選考の中に大学入学共通テストの結果を含めて合否を決定していた。しかしながら、令和6年度入試より工学部応用理工系学科・応用マテリアル工学コース、令和7年度入試より医学部保健学科が、大学入学共通テストと合わせて第2次選考を行うかたちから、第2次選考合格者の中で基準点に達した者を最終合格とするかたちに変更したことにより、それ以降これらの募集単位でも第2次選考合格者が発表されることになった。
- 3 この表における年度は入試年度を表す。また、北海道大学志願者及び北海道大学最終合格者は帰国生徒選抜（令和5年度までの名称は帰国子女入試）を除く。
- 4 ただし、「北海道の18歳人口比率（全国比）」は既卒者が含まれないが、「北海道大学志願者道内比率」、「北海道大学最終合格者道内比率」については既卒者が含まれるため、比較対象者が若干異なることに注意が必要である。
- 5 この表における年度は入試年度を表す。また、北海道大学志願者及び北海道大学最終合格者は帰国生徒選抜（令和5年度までの名称は帰国子女入試）を除く。

文献

- 橋村 正悟郎・池田 文人・飯田 直弘・岩間 徳兼・鈴木 誠 (2021). 「コンピテンシー評価」から見えてくる入学者選抜における資質・能力評価への期待と展望——成果・実績による portfolio 評価との比較も含めて—— 大学入試研究ジャーナル, (31), 257-264.
- 池田 文人・鈴木 誠・加茂 直樹 (2007). AO 入学者の追跡調査結果に基づく AO 入試の評価：平成13年度北海道大学薬学部入学者を対象にして大学入試研究ジャーナル, (17), 51-55.
- 池田 文人 (2009). 入試区分による入学後の学業成績の優劣の検証 大学入試研究ジャーナル, (19), 65-99.
- 文部科学省 (2022). 令和3年度大学入学者選抜における好事例集 Retrieved August 20, 2025 from https://www.mext.go.jp/content/221124_mxt_daigakuc02_000025557-21.pdf
- 文部科学省 (2024). 学校基本調査 Retrieved August 20, 2025 from https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm
- 竹山 幸作・山岸 みどり・池田 文人・鈴木 誠・柴田 洋・宮本 淳・喜多村 昇 (2011). 北海道大学の AO 入試——10年間の推移と課題——大学入試研究ジャーナル, (21), 105-110.
- 山岸 みどり (2002). 北海道大学 AO 入試の現況 物理教育, 50 (5), 309-312.
- 山岸 みどり (2004). 北海道大学 AO 入試——平成13年度～15年度—— 大学入試研究ジャーナル, (14), 57-62.
- 山岸 みどり (2006). 北海道大学 AO 入試の追跡調査 大学入試研究ジャーナル, (16), 197-203.